

カミングインという生き方

吉井 奈々

ジェンダーキャリアデザイン

My Way of Life, 'Coming in'

Nana Yoshii

Gender Career Design

<要旨>

私は、男性から女性への性転換者（male to female transsexual）である。経験上、ジェンダーやセクシュアリティは固定的なものではなく、流動的・社会的なものであり、親密なパートナーとの関係性において決まると考えている。私は、自らのジェンダーやセクシュアリティに関して、今でこそ「カミングアウト」した状態であるが、それまで自分のジェンダーやセクシュアリティを「受け入れよ」と自ら訴えたことはない。私は「カミングアウト」という生き方ではなく、「カミングイン」という生き方を大切に、それを実践してきた。トランスセクシュアルであることをカミングアウトするよりも、いざカミングアウトしたときに受け入れられる下地を作りながら、それまでと変わらず社会と付き合うように「溶け込む」方がよいと考える。「人に自分の考えを押し付けない」、「溶け込む」、そして「自分のことさえも決めつけない」。これが私が思うカミングインである。

キーワード

カミングイン	coming in
性転換（者）	transsexual
ジェンダー	gender
セクシュアリティ	sexuality

私は男性に生まれ、今こうして女性として生きているのだが、「物心ついた時から自分を女の子だと思って生きてきたの?」とよく聞かれる。私の答えは「いいえ」である。男性に生まれたからといって、幼少期から「私は女性が好きだ」とか、「私は男が好き」と自覚している人は少ないだろう。なんとなく初恋をし、人と人との関係性や、人とのコミュニケーションを通して、さまざまな環境の中で自分の性別や役割、「私はこういう風に愛されたい」というのが徐々に作られていく。私はジェンダーやセクシュアリティは固定的なものではなく、流動的・社会的なものであり、パートナーとの関係性において決まるものと考えている。

私は自分のジェンダーやセクシュアリティを「受け入れてください」と自ら訴えたことはない。しかしこれまで多くの人たちと関わり、仕事をし、恋愛をし、そし

て結婚もできた。ではなぜ自ら訴えなくてもそうなったのか。それは私が「カミングアウト」という生き方ではなく、「カミングイン」という生き方を大切にしてきたからだ。闇雲にカミングアウトするよりも、いざカミングアウトしたときに受け入れられる下地を作りながら、それまでと変わらず社会と付き合うように“溶け込む”ほうが良いのではないか。初対面の人にわざわざ自分のセクシュアリティ、ジェンダー、さらには生き方まで言う必要性はないだろう。例えば、「GID」(gender identity disorder: 性同一性障害)や「トランスジェンダー」(transgender)などの言葉は知る人ぞ知るであって、一般にはまだまだ馴染みがない。現に、世界のゲイタウンとして名高い新宿2丁目のゲイ、当事者たちでさえもそうした言葉を理解している人は多くないと思う。そして「そんなの（ジェンダー

やカテゴライズ)を気にしたことない」という人も少なくはないだろう。逆に悩めるLGBT (Lesbian, gay, bisexual, transgender)の人たちの中には、「私はトランスベスタイトだから」「私はエックスジェンダーだから」と自分自身をカテゴライズし、ラベリングしてしまっている人が少なくない。このような人たちは、ジェンダー論等の専門書を読んで、多くのことを学んだのかもしれない。ようやく「自分はコレだ」というジャンルを見つけられたのかもしれない。しかし、ジェンダーやセクシュアリティは流動的なものである。トランスセクシュアルの当事者である私でさえ、必死に自分探しをして「やっとの思いで」見つけられたものなのだ。だが、当事者がやっとの思いで探せたものでも、当事者ではない人からすれば「わけのわからないもの」なのだ。それは自分の心のうちに留めておけばいい。私はそう思う。

「弁護士」という言葉を聞くと、どんな仕事をしているのかはなんとなく想像できるが、「行政書士」「司法書士」「土地家屋調査士」となると、具体的にどんな仕事をしているのか想像がつかなくなる人もいるだろう。それと似ている。「セクシュアルマイノリティ」のカテゴリーをどう伝えていくかが大切なのではなく、それを知る、知らないにかかわらず、仲良くなれる人間関係作りこそが大切で、そうした人間関係ができていれば、自然と「溶け込む」ことができる、と私は考えている。街を歩けば多くの人とすれ違う。私たちは、その人たちを、あの人は女、あの人は男と一人ずつ考えて判断しているわけではなく、「感覚」で見ているにすぎない。だから、私のことも人が「女性」と思ったら女性なのだ。「女装」と思われたら女装、「オカマ」と思われたらオカマなのだ。そこでわざわざ自分を説明しなくていいだろう。それは「隠している」わけではなくて、「わざわざ言わないだけ」である。わざわざ言わなくても、人間関係や信頼関係ができていれば、自分がないところで万が一、「知ってる? ○○さんって元男性だったんだって」と言われても、「うん、なんとなく気付いてはいたけれど、元男とかそういうの関係なくない?あの人とはとてもいい人だし。私は好きだな」と言ってもらえるような関係性。それこそがカミングインしている状態である。自らあえて自分の生き方やジェンダー、考え方を押し付ける必要性は

無いのである。

私がそれに気付いたのはオカマバーで働き始めた時だった。オカマバーというのは面白いもので、もちろんお客様は楽しみたい、好きを好んで来ているのだが、その「好き」がキャバクラやホストクラブの場合は基本的に「異性との疑似恋愛」を楽しむため、つまりLOVEを求めて来るが、オカマバーではLOVEを求めては来ない。LIKEの方の好きなのだ。性的対象ではなく、恋愛でもなく、その時間を楽しみたいと思う人を接客する。そういう時には「オカマと付き合いたい」と思わせるのではなく「オカマだけど気持ちの良いやつだ」と思わせることが必要なのだ。中には「オカマは気持ち悪いんだよ」と罵声を浴びせる人もいるが、本当に嫌いなわけではなく楽しみたいという気持ちはその人にもある。どんな時でも「自分を認めて」と生き方やセクシュアリティを語ったり、押し付けたりはせず、楽しい話や仕事、コミュニケーションをとって行く中でゆっくり自然と溶け込み、いつの間にか受け入れてもらうようにするのだ。

どうしても自分のジェンダーやセクシュアリティで悩んでいる時には自分の価値観を押し付けてしまいがちである。しかし押し付けられた方としては、「?」ばかりで耐性のない言葉や専門用語、慣れていない存在には悪気なく拒絶反応を示してしまう。私たち、男に生まれて女になろうとしているのは少数派。「認められよう」ではなく、「溶け込もう」という意識でいる必要がある。これはくセクシュアルマイノリティの問題として考えると難しく思われてしまいがちだが、決してカミングインはセクシュアルマイノリティだけの特殊なことではない。一般社会でもカミングインしている例は多々ある。

例えば、京都や鎌倉などの老舗旅館、温泉地でもそうだが、日本の旅館で働いている外国人が増えているようだ。こういう外国人の方々は日本人以上に日本人らしく、日本人以上に日本を愛していたり、勉強していたり、古き良き日本を大切にしている。私たちでも知らないような漢字や日本の文化、四字熟語や日本語を知っていたり、着物や伝統芸能にも興味があったり、日本の伝統芸能ならば日本人が受け継ぐのが当たり前だったものでも外国人が受け継いでいるというケースも珍しくない。自分からわざわざ「私

は外国人です。認めて下さい」と言わなくても、「あの人は日本人以上に日本人だ」と、自然と受け入れられて溶け込むのである。私たちも同じで、一番言われて嬉しい言葉が「女性以上に女性らしいですね」である。これは女性は言われることのない言葉だ。私たちは女性になろうとしないと女性にはなれないので、より女性らしくあろうと、身振り、手振り、仕草、言葉づかい、日本人女性の奥ゆかしさ、しなやかさ、古き良き女性らしさを重んじている。しかしその一方で、経営者でもあるお店のママたちの裏の顔は男性よりも男らしい。普通の男性よりも芯が通っていて、粹を重んじる。そんな生き方をしている諸先輩方を多く見てきた。そんな諸先輩方からは「男よりも男らしく、女よりも女らしく、それでいて人間らしくあれ、その上でオカマらしくいれば、私たちは人から愛される」と教えられてきた。「女性になろう」とか「女性と同じ土俵に上がろう」とはまったく考えていない。そう思い、驕ってしまうと女性からは、「本当の女じゃないのに」とか「子どもも産めないのに」と言われてしまいかねない。卑屈になっているのではない。私の友人が出産し、子どもを抱かせてもらった時に女性の偉大さ、超えられないものを感じ、尊敬し、同じ土俵でと考えるのは失礼だと思ったからだ。

男性に対してもそうだ。男性は結婚して一家の大黒柱として定年まで何十年と働き続ける責任とプレッシャーを考えると、とても真似できない。だから女性にも男性にも敵対心は無く、フラットな状態で自分を考えることができた。そうすると「いやいや、私たちよりも女性らしいよ」と言ってもらえることも多くなり、女性として認められているけれども、別ジャンルでもある。それは特殊扱いのようであっても、拒否や否定とは違い、溶けこんで調和し、お互いにお互いを認め合い、脅かさず、「共存」している状態なのだ。私にとってはこれくらいの立ち位置が生きやすく、自分の中で楽な立ち位置なのだ。

もちろん最初からそう思えたわけでもない。2004年に法律が変わり、「性同一性障害者の特例法」ができて戸籍を変えることができるようになった時には、戸籍をいち早く変え、「女として生きていく」ことを決めた。オカマバーではなく女性のお店で働き、夜の水商売もやめて昼間の社会へ飛び出した。エステでの

受付を始めたが、その時はまだ「戸籍上女性」になれた喜びから、自分の「女性である」ことを押し付けすぎてしまっていたのだ。

以前なら「元男なんですか?」とか「オカマなの?」と聞かれても、「うん、そうだよ」と笑顔で答えられたのに、「もう戸籍の性別も女性になっているのだから、オカマ扱いしないでください」と人が変わったような対応をしていた。そうすると周りは私を女性としては扱わなくなる。「女性よりも女性らしい」とも見なくなる。「戸籍の性別を変えただけで女性ぶっているだけの、扱いづらい、話しかけにくい人」という見方になってしまい、人間関係に歪みが生じてしまった。仕事だけでなく、恋愛のパートナーとの関係性も同じである。「もう戸籍上も女性になっているのだから、元男性だと言いたくない」。しかしいつまでも隠しごとを抱えたままでは、パートナーは心を開くこともできず、関係は長続きしない。戸籍上の性別を変える時には、「この先の人生はバラ色だ」と思って変更をしたが、女性であろう、元男性であった事実を消そうとすればするほど、人は離れ、「私は何のためにここまでお金もかけ、痛みにも耐え、ここまでやってきたのだろう、何をやっても幸せになれないのかな?もっとなにか努力すれば、幸せになれるのかな?」と嘆く日々が続いた。しかしこう考えたことで吹っ切れた。「今までの自分を受け入れて、今までの、そして今の自分を好きでいないと、自分をも好きになれない人を、誰も好きになんかなってくれない」。考え方を改め、「わざわざ言わないけれど、言われたらそれをあっけらかんと受け入れる」ようにしたら、再び人との関係性が築けるようになった。女性として見てくれる人には女性として接し、オカマと思う人にはオカマとして接する。その相手にまずは任せよう。相手は私のようなセクシュアルマイノリティ、オカマと出会うのは初めてかもしれない。だからどう接したらよいかわからないだけなのかもしれない。例えば、外人さんと出会ったとしよう。どこの国の人かはわからない。仲良くなりたいけれど、上手く表現できなくて、不器用なことで相手を不快にさせてしまうかもしれない。その外人さんから「僕の国は〇〇じゃないよ、肌の色で判断しないでよ」と冷たく言われて拒絶されてしまった。「もう仲良くなれないのかも」と次の機会を伺うどころか、それからずっと避けてしまうか

もしれない。そういうことと同じなのだ。

まずは相手に合わせ、仲良くなり、人間関係を作って、話す下地が出来上がってから、「オカマのことはオカマちゃんって、ちゃんづけてくれると嬉しいな」とか、少しずつ解きほぐしていけばいい。「郷に入れば郷に従え」ではないが、セクシュアルマイノリティが水商売やオネエとしてではなく、「女性」として一般社会で生活し、仕事を「普通」にしたいのであれば、「普通のモノサシ」を知って、普通のモノサシに自分が合わせていく必要があるだろう。専門用語や専門的な考え方を押し付けて理解してもらおうとするのは、土台無理な話なのである。

それは「我慢している状態」ではないか、ありのままの自分らしくない状態だ、という意見もあるかもしれない。しかし、「我慢」と「忍耐」はまったく別で、こうした普通のモノサシに合わせる行為は「我慢」ではなく「忍耐」なのである。「我慢」は自分が今「こうしたいのにな」という欲求を抑えることで、「忍耐」は「こうなりたい」とか「こうだったらいいな」という希望、理想があって、それを叶えるために「理想と違う今の状況」を耐えることである。例えば、あるカップルが、これからの二人にとって良い方法を探すために、自分の希望を少し曲げるのは、今その瞬間だけを見たら我慢かもしれない。けれども結果としては「お互いを尊重し合える」という理想に近づくために必要な行為なのだ。すぐに結果を求めないで、ゆっくりと長い目で見ることも重要で、先ほどの「日本の旅館で働く外国人」のように、日本語を覚えたり、新しい土地や風習を学んだりして、そこに溶け込むとする行為は、その先の夢や理想、希望のためであり、「我慢」ではないだろう。夢や希望というと大きいことのように思えるが、自分にとってその先にほんの少しの幸せが見えることでの努力や忍耐は苦行ではなくなる。「ありのまま」や「自分らしく生きる」ことは大切だが、「ありのまま」を押し付けてしまうと、ただの「わがまま」になってしまう。とくに職場や学校など、集団生活、組織の中でそれを望むのは間違いであろう。職場では「個性を認めろ」と主張はするが、恋人や家族、パートナーの前だとありのままではなく、パートナーに合わせてしまう。それは逆であって、家族やパートナー、友だち、親友にだけ「ありのままの状態」

を見せればいいのだ。友だちも、全員に全部見せて、すべてを受け入れてもらおうとすると難しい。この人たちの前では○○な自分、この友だちの前では△△な自分、というように「様ざまな自分のありのまま」があってもいいわけで、自分は「コレ」だと一面だけにする必要はない。セクシュアルマイノリティだからといって、それをすべての人に理解してもらおう必要性は無く、パートナーの前ではセクシュアルマイノリティの自分、でも会社の時にはヘテロセクシュアル（異性愛者）であるように見せられる自分、セクシュアルマイノリティをオープンに笑って話せるセクシュアルマイノリティの友だちの中の自分、他にも何通りもの自分がある方が人間味があり、魅力的だと私は思う。

ダイヤモンドもブリリアンカットという複雑なカットからの光の屈折、輝きがとても美しく魅力的なわけで、ダイヤモンドが単純なツルツルの球体だったり、ただの立方体だったりしたら、ビー玉やサイコロと変わらず、魅力も無くなる。人間も多くの面があって、多くの顔や表情をもっていて、いろいろな世界で生きていく。そのカットの仕方が人それぞれだから、面白くて出会いが楽しくなる。魅力にセクシュアルマイノリティも、ジェンダーも、肌の色も、国籍も、何も関係ない。そういうオープンマインドでアクション（行動）すると世界が変わり、世界が広がり、自分も変わっていく。私は、ジェンダー、セクシュアリティの多様性はもちろん認めるが、日本的な女らしさ、男らしさという伝統を大切にしたい。男尊女卑的なものでは決してなく、MtFとして日本人女性のもつしなやかさはとくに大切にしたい。強くそう思うのは、私がトランスセクシュアルであるがゆえに、一般女性以上に女性らしく生きようとしてきたからかもしれない。

私が思うカミングインは「人に自分の考えを押し付けない」、「溶け込む」、そして「自分のことさえも決めつけない」である。そうするのは、他人のためではなく、実は自分が楽に幸せになるためである。自分のすべてを初対面の人に正しく伝えて理解してもらうことは難しい。だからこそ「これからの人間関係を築くための下地作り」こそが、カミングインなのである。

そしてカミングインすることは、自分も、周りも幸せである「あり方」を考えること。そのためにも今の幸せを感じて、今までの自分を受け入れること。「今を変

えよう、社会を変えよう」ではなく、その今自分の置かれた状況、環境をどう楽しむか。「もっと」ばかり追い求めるのではなく、今の状況を「ま、いっか」と思えることがとても重要である。

私はこの性に生まれて、多くの経験をし、もちろん失敗もあったがその失敗を糧に成長することができた。この性だからこそ出会えた多くの方々に心から感謝している。

参考文献

- 1) 吉井奈々, 鈴木健之:G.I.D. 実際私はどっちなの!?
——性同一性障害とセクシュアルマイノリティを社会学Ⅱ, 恒星社厚生閣, 東京, 2012
- 2) 吉井奈々:男に生まれて, 女になって, 結婚もできました, 日本文芸社, 東京, 2013